

『絵入朝野新聞』に連載された『伊曾保物語』——翻字編——

吉見 孝夫

この稿は、『絵入朝野新聞』に明治一八年（一八八五）九月一日から三〇日まで連載された『伊曾保物語』の原文を翻字し、簡単な校注を付したものである。原文は、慣れれば読むのに大きな苦勞はないが、多少異体の仮名が使われ、またマイクロフィルムから複写した「複写編」が読みにくいので、それらを補うために作成した。翻字に当たっては以下の「凡例」に従った。

凡例

- 一 表記は、漢字・仮名の区別、振り仮名、句読点等、原則として原文の通りとする。
- 二 原文の漢字のうち、常用漢字表にあるものは現行の字体に改める。「申」「候」の活字には楷書体と草書体とが使われているが、ともに「申」「候」とする。
- 三 原文の仮名は現行の字体に改める。「こと」の合字は「こと」とする。「八」「三」を字母とする仮名は、平仮名と認め、「は」「み」と翻字する。「見」の草体は、文脈により、漢字か仮名かを判断する。
- 四 改行は原文どおりとする。ただし、一行が極端に短い場合は、改行を／で示して追い込みとする。

- 五 推定で読んだ箇所には「」を付す。
- 六 接続を示す㊦㊧等の記号は省略する。
- 七 香雪山人の序文には、適宜句読点を加える。
- 八 本文の句読点は原文のとおりとする。原文では九月八日以降は句読点があるが、七日までではない。
- 九 新聞紙面の段の替わり目は「」で示す。二四日の紙面の替わり目は「」で示す。
- 一〇 繰り返し記号には数種の活字が使われるが、漢字の場合は「々」、仮名の場合は「ゞ」「ゞゞ」、二字以上の場合は「く」「くく」とする。
- 一一 各話の末尾に校注を付す。校注は、連載本文の原本である天理図書館蔵の卷子本『伊曾保物語』との異同を示す。卷子本が属する第二種本系統の『伊曾保物語』との異同等、他の注意すべき点は括弧内に示す。第二種本は遠藤潤一「天理図書館蔵古活字本『伊曾保物語』第二種本について（上）（下）」『東横国文学』第二二号（一九八九年三月）、第二二号（一九九〇年三月）に拠る。

○旧訳伊曾保物語の考 香雪散人記

海外の国々の書を我皇国の詞もて記し留むるわざは
何れの時より創まりけむ。筑紫の国人の、外国の教法に
なびきて従ひ学ぶ比には、其道の神を拝む詞など口づ
からに受得たる儘を記し留めし類は稀にありし様な
れど、夫はた此教をいたく禁め戒められし時、悉く取
集めて焼き失はれしかば、今に遺存まれるはいと少し。
されど此は只彼国の語のまゝに記せるなれば、為し易
くしてありもすべき事なり。彼国の詞を我皇国の詞に
うつしかへしは、外国の学びのかつゝ開けたるより
後の事なるべければ、荷蘭の国人の長崎に来れるに就
て物学べる医師のたれかれの手に成れる者などこそ
有もせめ。夫れより以前にはつゞ々さる書有るべし
とも思ひ懸ぬに、疑はしと訝らるゝまで奇しく珍かな
る書こそ世に現れけれ。其はこよなき書家とおほやけ
にゆるされたる日下部鳴鶴のうしの、此の比或方より
得られたる伊曾保物語の二巻になむ有りける。イソツ
プなどはいはで、伊曾保としも皇国の語めきて記せる
は故こそあらめと、ゆかしさに絵入朝野新聞社の武内
ぬしの借りもて来しを切に請ひて見るに、表紙は紺紙
に金泥もて蓮水草などよしあるさまに描き、丹色の標
題に紅の唐糸の組紐をつけ、から草彫りつけたる鍍
金の軸を付られたり。比紺紙の表紙より都ての装飾は
足利將軍の代の中比より元龜天正の以前比までの歌

物語ぶみの古写本また仏經などに類多かる装飾にて、
是より上なるはたくみにすぐれたるもあれど、又時代の
下れるは同様なるも何処か劣るところ見ゆるは、古
き草紙巻ものゝ類に心とどめて見識れる人は熟知る
ことぞかし。紐とき開きて見るに料紙は鳥の子紙の厚こ
えたるに金銀泥もて梅の花を密くも粗にも描き、先づ
目録をあげ、さて本文を記したり。其順序を見るに、近く
此方に舶載たれる原書とは異なる処、闕たる処あるの
みか、比譬に引る物などにもかはれるがあるは、蛙が主
君を望みて柱を得、また改めて鷺を授けられしといふ
を禽にかへしゝ類にて、此方にては鷺よりも禽の方相
応と思ひてかへぬるにや。意殊なる外国人の作れる書
をうつし記さむには覚り易きを旨とすべければ、彼の
直訳にはあらで意訳といふかたにせしなるべし。原書
と併せ見ば、斯る処猶ほ多からむ。詞はいたくも古めか
ず、さりとしてむげに卑しともあらず。筆づかひゆるら
かにて、世に飛鳥井流といふに似かよひたり。飛鳥井流
は世尊寺家の筆法を受け伝へて、飛鳥井の雅親朝臣の
書き出給へる筋をいふ称へにて、世に榮雅流ともいひ
倣へり。榮雅はすなはち雅親朝臣の法名にて、東山義政
と世を同くし、応仁文明の比の書家にて其流れを汲む
者もいと多かりけり。されば、初めに足利時代の中比よ
り元龜天正以前の装飾なりといひしは、此書の流と併
せて考ふるも故なきことにはあらじかし。さて此の時代
に外国の書よみ解て皇国の詞に移しかふる博士はあ
りとしも覚え、絶て無しといはむとすれど此巻あり。

疑ひ惑はじと思へど、論ふべき証の乏しきを如何せむ。されど強て考ふるに是も亦彼耶蘇の教法の行はれし比、外国人の口づからに教へられしことを何人かよく質問して、斯く皇国詞もて書記しゝならむ。此書よ彼国の教法書には非めれど、齊しく身を修むる補助となりて教法の上にも協へる書なれば、面白しと見をかしと読むうちに教法の方にも心傾ぶくべきくさはひにとて、先づ此書をや授けつらむ。

(以下次号)

伊曾保物語

かはつか主君をのそむ事
とひと鳩の事
からすとくしやくの事
はひとありの事
いたちの事
むまと師子王の事
しゝわうとはすとの事
馬とろはの事
鳥けたものとたゝかひの事
かのしゝの事
庭鳥ときつねのこと
腹と五たいの事
人とろはの事
狼とはすとの事
さると人の事
師子王とろはの事

ありとせみの事
狼といのしゝの事
きつねと庭鳥の事

武内馬溪製版

二日 第三面

○旧訳伊曾保物語の考 (前項の続)

香雪散人記

然ど斯めでたく訳出せるは、如何なる順序に拠て成るにか。其は思ひ得ざれど、此巻の表紙といひ軸といひ、只風雅なる装飾には非で、むねと仏經の様に仕なせるは、教法の筋に因て受得たる、是も一の証なるべし。然ば何處の宣教師が持渡りて、何處の人の受得たる者ぞ。羅馬葡萄牙などの人は、古くより皇国に來航つとか聞えたれば、夫等にや。伊達政宗が支倉何某を羅馬に遣りて教法を伝へむとせし際などに受得たりとせむかと思へど、まさしく夫よりは古し。さては筑紫の大友か周防の大内の家などに受得たる物と定めむか。是等の家々は当時外国との交ひありて、教法の道をも習ひ学べる人ありしなど仄に聞けど、島原に事ありし後は、この事いたく禁止られしまゝに、記し留めたる物をも深く隠匿し、語継ぎ云ひ伝へることを包みて漏さざりしほどに、今にしては考ふべきよし無くなれど、必らず威権ある国のか

みか、然らずは夫に匹敵べき人の手に成れるにあらずは、争でか万事の装飾のかばかりには整備べき。されば今の世までもおほやけの禁制を憚りて秘もて伝へたるは、由緒ある人の末なるべきは疑ひも無れば、こは心ゆく迄穿鑿知らまほしきものなり。其はおのれが古物好める私意もていふにはあらず。外国の書の皇国に伝はれる考証を得むとのわざにて、皇国の歴史にも亦必要な事なればぞかし。今此巻のはじめを写真版といへるに写して絵入朝野新聞に載せらるゝと聞きて聊か思ふよしを記すになむ有ける (完)

かはづが主君をのぞむ事

あてゑるすといふ所にその主君なくて何事もこゝろにまかせなんありけるその所の人あまりにほこりけるにやしゆ人をさだめばやなんどゝぎぢやうしてすでに主人をぞさだめけるかゆへにいさゝかのひがごとあればその人さいくわにおこなふこれによて里の人にしゆく人を定めけるをくやみなしめどもかひなしそのころいそほその所にいたりぬ所の人に①このことをかたるにその善悪をいはずたとへをのべて云むかし有河にあまたのかいるあつまり居て我しゆじん②さだめばやとぎぢやうし侍りきもつともしかるべしとて各々天に仰我しゆ人をあたへまへ③ときせいす天道之をあはれみて柱を一つ賜りけりそのはしらの川におち入おとそこにひゞきておびたし④このゑにおそれてかはづども④水中にしづみかくるしづま

りて後おでいのなかよりまなこを見あげなに事もなきさまに出よ⑤とておのゝなきさにとびあがりぬきてこのはし⑥をいねうしてわれがしゆ人とぞもてなしけるされども無心のはしらなれば終にあざけりて各各此うへにとびあがり又天道にあふぎけるは主人はこゝろなき木なりおなじくは心あらんものをたべかしといのりければにくいしやつばらが物ごのみかなとて此たびはとびをしゆ人とあたへ給ふしゆくんによて蛙かのはしらの上にあがる時はとびこれを急じきとすその時かはづちたび⑦こゝろはいすれどもかひなしそのごとく人はたゞわが身にあたはぬ事をねがふ事なけれ始より人にしたがふ物のいまさらひとり身とならんもよしなき事なり又じゆうにありける人のしゆ人をたのむもひが事なりたゞそれぐにあたることをつとむべき⑧

〈校注〉①人々 ②しゆしんを ③あたへ給へ ④かいるとも ⑤なきそまかり出よ ⑥(卷子本も「はし」。第二種本「はしら(柱)」とあり、卷子本「ら」の脱字) ⑦ちたい(第二種本も「ちたい」。「千度」と解すべき所だから、「ちたび」が正しい) ⑧(第二種本「つとむべき事なり」)

三日 第二面

○旧訳伊曾保物語

とびとはとの事

ある時はととびとならびるけるところにとびこの
 はとをあなどりやゝもすれば多じきとせんとす其時
 はとせんぎ評定して驚のもとにゆき①申しけるはと
 びといふ下せんのふたうじんありやゝもすればわれ
 らにこめ見せがほなりいまより以後そのふるまひを
 なさぬやうにはからひたまはゞしゆくんとあふぎた
 てまつらんといひければわしやすくうけかへつて②は
 とを一どにめしよせかたはしにねちころしぬそのゝ
 ころはと申しけるはこれ人のしわざにあらずわれと
 わが身をあやまつなりわしのはからひたまふところ
 道理しごくなりといひけるそのごとくまだわが身に
 はじめよりなきことをあたらしくしだすはかへり
 てそのくもあるものなりこの後にちたびくゑんよ
 りはことのさきにひとたびも案ぜんにはしかじとぞ
 見えけるいさゝかのなげきを忍ひかねてかへりて大
 なんをうくるものおほしかるがゆへにことはざにい
 ふせうなんをしのばざれば③かへりてたいほうをみだ
 す④とも見えたり

〔校注〕①ゆきて ②うけかつて ③しのくされは（仮名
 草子諸本は「凌ぐ。されば」と解される。これは論語の「小
 不忍則乱大謀」の引用であり、新聞連載の形に訓読できる）

④みたる

私たちの事

ある時いたち鼠のわなにかゝることありけりそのぬし

これを見つけてたちまちころさむとすいたちさゝへ
 てまをしけるはいかに主人聞召せわれをころしたま
 ふべきことはりなしそのゆへは御内にはいくばいす
 るねずみといふいたずらものをばほろしほし候①その
 うへいさゝかおんさはりともなること候はずと申し
 ければあゝるじ答へて云ふ何／をもつて／かたすく／
 べきだう／りとせん／や鼠をほ／ろぼすと／云ふもわ／
 がしむし／よく②にあ／らず汝が／多じきと／せむため／
 なりいは／れなしと／てうちこ／ろしぬ／
 そのごとくわがな／んぎ出 来するとて／
 あはてゝことばをいふべからずはじめおはりを思案
 すべし命をうしなはんのみならず後日のあざけりく
 ちおし③となり

〔校注〕①ほろほし候 ②（第二種本「しゆんしよく」。「潤
 色」と解すべき所） ③くちおしし

四日 第二面

○旧訳伊曾保物語

からすとくじやくの事

あるときからすくじやくをみてかのつばさにさまざ
 まのあやあることをうらやみとある木かげにくじや
 くのはのをちけるをひろひとりてわが尾羽にさしそ
 へてくじやくのふるまい①をなしわがはうばいをあな
 どりけりくじやくこのよしをみてなむちはいやしき

からすの身となりなんぞわれらがふるまひを^②なしけるぞとおもふまゝいましてまじはりなさをそのときからすものはうばいにいふやうわれよしなきふるまいをなしてちじよくをうるのみならずさんざんにいましめられぬ御辺たちはわかきひとなればけうかうそのふるまひをなしたまふなと申しけるそのごとく身いやしうしてかみつたのふるまいをなしあるひはまじはりなせば終にをのれがもとのすがたをあらはすによつてちじよくをうくることさだまれる儀なり悪人として一たん善人のふるまいをなせどもつるにわがほんしやうをあらわすものなりこれをおもへ

〈校注〉①ふるま ②ふるまひ

獅子王とはすとのこと

あるときしゝわうそのあしにくぬぜをたてなんぎに及びける時かなしみのあまりにはすとのほとりに「ちかづくに①はすとのこれをおそれてわが羊をあたへてけり獅子王ひつじをおかさずわがあしをはすとのまへにもたぐはすとりこれをこゝろえてそのくぬぜをぬいてくすりをつけてあたへぬそれよりしゝわう山中にかくれぬあるときかの獅子王かりにとらわれて籠にいれられ罪人をいれてこれをくらわしむまたかのはすとりそのつみあるによつてかのしゝ籠にをしいる獅子王あへてこれをおかさず②かへつて涙③をながひてかしこまりぬしばらくありて人々ろふのう

ちをみるにさしもにたけき獅子王耳をたれひざをおりてかのはすとのをけいごす物のぐをいれておかさんとするに獅子王これをばなぐりすつ④主このことをききて汝なにのゆへにかかくけだものにあわれまれけるぞといひければくだんのしさい申しあらはす人々このよしをかんじてかゝる畜生にいたるまで人の恩をば報じけるぞやとかんじあはれみけるこれによつてしゝわうもはすともゆるされぬそのごとく人としておんを⑤なすときは天道之をうけたまふなりいささかのおんをも人にうけばこれをほうぜんとつねにおもへ

〈校注〉①近づく ②おかす「犯さず」と解すべき所

③涙（巻子本の「涙」を「なんだ」と読むべき積極的な理由は見出せない） ④これをかなくりすつ ⑤（第二種本「おんをしらぬはちくしやうにもをとる物なり人におんを」。巻子本に脱落がある）

五日 第二面

○旧訳伊曾保物語

人とのぼの事

あるひと驢馬に荷をおほせてゆくにこのろばやゝもすればゆきなづむことありけりこのひときつくわいなりとていたくむちをおほせければろば申しけるはかかるうきめにあはんよりはしかじたゝしなばやとぞ

申しけるかのひとをいたくいましめておひやるほ
どにゆきつかれて終に命おわりぬ①

かのひところにおもふやうかゝるしゆくせつたなき
ものをばそのかはまでもうちいましめてとてたいこ
にはりてばちをあてけりそのごとくひとの世にある
こともいさゝかのかんなん②なればとてしなんとねが
うべからずなにか命のおはりをまたず身をなげん
とする③ことはいたつてふかき罪科たるべしこれをつ
つしめ

〔校注〕①（卷子本もここで改行する） ②なんかん（「難
艱」） ③（第二種本「なけなんとする」）

馬と師子王の事

ある時むま野へいでゝ草をはみけるところに師子王
ひそかに是を見てかのむまを食せんとおもひしがま
づぶりやくをめぐらしてこそと思

ひむまのまへにかしこまりて申し
けるは御辺はこのほど何事をなら

ひたま／ふぞわ／れはこ／のごろ／いがく／をなん／
つかま／つり候／となん／申しけ／ればむ／まし／
わうの悪念をさととりてわれもたばからばやとおもひ
しゝわうにむかひて申しけるは④そも／御辺はうら
山しくもいがくをならはせたまふものかなさいはひ
わがあしにくゐぜをふみたてゝわづらふなり御らん
じてたべかしとなんいひける師子王多たりと見んと
いふさらばとてむまかたあしをもたげければしゝわ

うなに／＼ろもなくあをのきになりてつめのうらを
見るところをもとよりたくみしことなればしたゝか
に師子王のつらをつゞけさまにけんたりける⑤さしも
たけしゝわうもきをうしなひておきもあがらずそ
のひまにむまははるかにかけさりぬそのゝちわう④は
う／＼とおきあがり身ぶるひしてひとりごとをなし
けるは⑥よしなきそれがしがいづ／＼こと⑥にてすでにいの
ちをうしなはんとす道理のうへよりもつていましめ
をかうふることこれむまのわざにあらずたゞ天道の
おんいましめとおぼえけるそのごとく一さいの人
げんもしらぬことをしりがほにふるまはゞたちまち
恥辱をうけんことうたがひなししることをしることもし
らざる事をばしらずとせよゆるかせにおもふことな
か「れ」

〔校注〕①師王（卷子本に脱字） ②申ける ③ふんたり
ける ④しゝわう ⑤申けるは ⑥はかりこと

六日 第二面

○旧訳伊曾保物語

師子王とろばのこと

ある時ろばしゝわうにゆきあひいかにしゝわうわが
山にきたりたまへ威勢のほどを見せいらせん①といふ
師子王おかしとおもへどもさらぬていにてともなひ
ゆく山のかたはらにをゐてろばおびたゞしく②はしり

めぐりければそのおとにおそれてきつねたぬきそれ
と①いふものこゝかしこよりにげさりぬるはしゝわう
に申しけるはあれ見たまへや師子王かほどめでたき
いせいにてはべるとほこりければ師子王いかつてい
ふきつくわいなりのばわれはこれしゝわうなり汝ら
がごとく下らうの身としてびろふをふるまふことらう
ぜきなりといましめられてまかりしりぞくその下は
いの身として人とあらそふことなかれやゝもすれば
わが身のほどをかへりみずして人とあらそふはてに
はちじよくをうくるものなりゆるかせにおもふことな
かれ

〔校注〕①みせまいらせん ②おひたゝしく（一七世紀に
おいては「おびたたく」） ③たぬきそなど

さると人の事

むかししやうぢきなる人とそらごとをのみいふひと
とありけりこのひと①さる／＼ある／＼とこ
ろにゆきけり／＼しかるゝ②ある／＼木の／
もと／＼にさるゝもあ／＼またある③なかにを／
いてをの／＼や／＼まじきさるありか／＼のうそびとさるの／
そばに近づきてれ／＼いのうそを申しけるはこれにけだか／
く見えさせたまふはましらわうにてわたらせたまふ
かその外めん／＼みえさせたまふは月卿雲客にわた
らせたまふかあないみじきありさまと④ほめけるまし
らこのよしをきゝてこれこそ⑤まことの帝王にておわ
しませとて引出物などしけるしかるをかのしやうぢ

きなるものおもふやう是はうそをいふにだにひきで
もの出したりければまことをいはんになじかは得ざ
らんとてかのさるのへんにゆき
て申しけるはめん／＼の中にと
したけよはひおとろへてくびの
はげたるもありさかんにしてよ
くものまねするべくもありなん
とぞありのまゝに申しければま
しらおほきにいかつてさるども
いくらもむさぶりがゝりてつゐ
にかきころしぬそのごとく人の
世にある事もこびへつらふもの
はいみじくさかへすなをなるものはかへつてがい
をうくることありこのきをさとてすなほなるうへにま
かせてくゆることなかれ

〔校注〕①（第二種本「此二人」） ②しかるに ③（第二
種本）「なみある」 ④ありさまとそ（第二種本「ありさ
ま」と） ⑤（第二種本「にくき人のほめやうかな是こそ」。
卷子本に脱落がある）

八日 第二面

○旧訳伊曾保物語

かのしかの事

あるとき、かのしか②河のほとりに出て水をのみける

時^{とき}汝^{おのれ}がつゝかけ水^{みづ}にうつりて見えければ、この角^{つの}のありさまを見てさてもわがいたゞきけるつのは万^{よろず}けだものゝ中^{うち}にみならう③ものある可^べらずと、かつはこゝまんのおもひをなせり又^{また}わが四^よつ足のかけ水^{みづ}そこにうつりていとたよりなくして、而^{しか}も／ひづめ二つにわれた／り又^{また}しか④心^{こころ}に思^{おも}ふや／うつのはめでたふ侍^{はべ}れど、わが四^よつのあ／しは、うとましげな／る⑤と思^{おも}ひぬる所^{ところ}にこ／ころより人^{ひと}のこゑほ／のかに聞^{きこ}え、そのほ／か犬^{いぬ}のこゑもしけり／是^{これ}によてかのしか山^{やま}／に⑥にけ入^いる、あまり／にあはてさはくほど／に、ある木^きのまたに、／をのがつのをひき／かけてしたへ、ぶら／りとさがりにけり、／ぬかん／とすれど／もよしなし、しか⑦心^{こころ}／に思^{おも}ふやう、よしな／きたゞいまの我心^{わがこころ}や、いみじくほこりけるつのも、我^{わが}あだとなりて、うとんじゝ四^よつのあしこそ⑧、わがたすけなるものと、ひとりごととして思^{おも}ひたへぬ、そのゝとく人も又^{また}是^{これ}にかはらずいづきかしづきけるものは「あだとなりて、うとんじしりぞけぬるは⑨、わがたすけとなるものと、こゝくわいする事^{こと}あるものなり（校注）①かのしゝ ②かのしゝ ③又ならふ ④しゝ ⑤（第二種本「うとましけなり」） ⑥しゝ山中に ⑦しゝ ⑧つもあとに成てうとんして四^よつのえたこそ（卷子本の「つも」は「つもの」の誤脱。「あだ」「うとんじゝ」の方が文脈に合う。「あだ」は一七世紀においては「あた」）

⑨（第二種本「しりぞけぬるものは」）

ありとせみの事^{こと}
さるほどに春^{はる}すぎ夏^{なつ}たけ秋^{あき}もふかくて冬^{ふゆ}のころにもなりしかば日^ひのうら／＼なるとき、ありあなよりはいゝでゑじきをほしなどすせみきたつてありに①申^{まを}すは、あないみじのありどのや、かゝるふゆされまでもさやうにゆたかにゑじきをもたせたまふものかなわれにすこしゑじきをたびたまへと申しければ、あり答^{こた}へていふ御^ご辺^{へん}は春秋^{あるあき}のいとなみには何^{なに}ごとをかしたまひけるぞといへば、せみ答^{こた}へていふ夏^{なつ}秋^{あき}身のいとなみとては木^こずゑにこゝろふ②ばかりなり、其^{その}おんぎよくに、とりみだし、ひまなきまゝにくらし候^{もち}③といへば、あり申しけるは今^{いま}とてもなどうたひたまはぬぞ、うたひちやうじてはつゐにまひとこそ④承^{うけた}まはれ、いやしきゑじきをもとめて何^{なに}にかはし給^{たま}ふべきとてあなにいりぬそのごとく人^{ひと}の世^よにあることも我^{わが}ちからにをよばんほどはたしかに世^よのことをもいとむべし、ゆたかなる時^{とき}つゝまやかにせざる人はまづしうしてのち、くゆるものなり、さかむなる時^{とき}かくせざれば老^{おい}て後^{のち}くゆるものなりゑひのうちにみだれぬれば、さめての後^{のち}くゆるものなり返^{かへ}す／＼もこれをおもへ

（校注）①ありと ②こたふ ③候（「そろ」と読むべき積極的な理由は卷子本には見出せない） ④まひとこそは

九日 第二面

○旧訳伊曾保物語

鳥とりけだものとたゝかひの事こと

あるとき鳥とりけだものと、すでにたゝかひにをよぶ鳥とりの方かた①いくさにまけて今はかうよと見みえけるとときかうもりちくるいに、こしらへかへる、鳥とりどもうれへていふ、かれらがごときのものさへ、けだものにくだりぬ今はせんかたなしとかなしむ所ところにわし、申しけるはなにごとをなげくぞ、われこのぢんにあらんほどは、たのもしく思おもへといさめて又またけだものゝぢんに、おしよせ此度このたびはとりのいくさよかんめれ、たがひにくわほくしてんけり、その時ときとりども申しけるはさてもかうもりは二心ふたごころありける事こといかなるさいくわを②、あたへんといふ中なかにこゝう③の鳥とりあへて申しけるはあれほどのものをいましめてもよしなし、しよせんけふよりして、とりのまじはりをなすべからず、白日はくじつにはいくわいすることなかれと、いましめられて、とりのつばさはぎとられ今はしづかみのやぶれをきて、やう

やう日暮ひくれにさし出いでける④、そのごとく人もしたしき中なかをすてゝ、むやくのものと、くみすることなかれ六親しんふわ「な」れば天道てんだうにもはづれたりと見みえたり」

〔校注〕①鳥の云 ②いかなるさいくわをか ③こらう④さし出けり

はいとありとのこと

あるとき、はひありにむかひて、ほこりけるは、いかにありどの、つゝしんで①承うけたまはれ我われほどくわはういみじきものは世よにあるまじ、そのゆへは天道てんだうにたてまつり、あるひは国王こくわうにそなはるものも我われさき②なめこゝろむ、しかのみならず百官ひやくわんけいしやうのいたゞきをもおそれず、ほしめまゝにとびあがり候まち③わどのばらがありさまは、あつぱれたなきありさまとぞわらひ侍はべりき、あり答こたへていふもつとも御ごへんはさやうにこそ、めでたくわたらせたまへ、たゞし世よにさたし候こゝろは御辺ごへんほど人にきらはるゝものなし、さらばかうはひそ④などのやうに、かひかびしく⑤あだ⑥をもなさで、やゝもすれば人ひとにこころさる、しかのみならず春はるすぎ夏なつさりて秋風あきかぜ立ちぬるころ⑦やうやくつばさをたゝき、かしらをなでゝ手てをするさまなり、秋あきふかくなるにしたがつて、つばさよりこしぬげて、いと見みぐるしきさまとぞ、申しつたへける、わが身みはつたなきものなれども春秋はるあきのうつるをもしらず、ゆたかにくらし侍はべるなり、みだりに人をあなづりたまふものかなと、はだしめられて立ちさりぬ、そのごとく、いさゝ

かわがみにわざあればとて、みだりに人をあなづる
時はかれ又をのれをあなづるものなり

〔校注〕①つしんで ②（第二種本「まつ我さきに」） ③

候 ④かそはひそ（「蚊ぞ蠅ぞ」。第二種本「かそはちそ」）

⑤かひかひしく ⑥あた（十七世紀においては「あた」）

⑦立ぬるころは

一〇日 第二面

○旧訳伊曾保物語

馬とろばの事

あるとき駿馬①よきかいぐ、をゐて、その主をのせて
とをりける、かたはらにろば一匹きゆきあひたり、か
のむまいかつていふ、ろば何とて礼拝せぬぞ、なんぢ
をふみころさんも、いとやすきことなれども、なんぢら
がごときものは②、したがへてもことの数にならねば③
とて、そこをすぎぬ、其後④何とかしたりけん、かのむ
ま二つの足をふみ折てなにの用にもたつことなし、是
によて土民の手にわたり侍りき、いやしきしづのや
につかひけるならひ、ふんどをおほせて、ひきあるき
ぬ⑤、そのむまのさまも、やせおとろへ、あるかなきか
のすがたになり侍りぬ、ある時このむまふんどを
おほせてとほりける、くだんのろばゆきあふ、かのろ
ばつく／＼と、このむまを見て、さてもさても御辺は
いつぞや我を⑥のしりたまふ、くわうげんのむまに

て、わたらせたまはずや、何としてかは、かゝるあさ
ましきがたとなりて、かほどいやく⑦すみなれ候
ども⑧、いまだかゝるふんどをばおはず、いつぞやのよ
きかいぐともは、いづくに、をかせたまふぞと、はづ
かしめければ⑨、返事もなふてにげさりぬ⑩
そのごとく人の世に在てたかきくらあにあるといふ
とも下らうのものをあなづることなかれ、ういむじや
うのならひ、けふは人のうへ、あすはわがうへ⑪とし
るべし、たんのゑいぐわにほこりて人をあやしむる
ことなかれ

〔校注〕①能馬（「良き馬」） ②なんちらかごときのもの

は ③ならぬは ④其後 ⑤ひきありきぬ ⑥（第二種本

「我らを」） ⑦かほといやくしきふんとをはおい給ふそ我い

やしく ⑧候へとも ⑨（第二種本の「恥しめければ」は、

他系統本に従うならば、「はちしめければ」と読むと推定さ

れる） ⑩（卷子本もここで改行） ⑪わかみのうへ

腹と五体の事

あるとき五たい六こんをさきとして腹をそねんで申
しけるは、われらめん／＼はいとけなき時よりも、そ
のいとなみをなすといへども、くだんはら①といふも
のは、わかうより終になすことなくて、あまさへわれ
らをめしつかふわぎをなんしける言語道だんきつく
わいのしだいなり、いまより以後かのはらにしたが
ふべからずとて五三日は五たい六こん何事もせずし
よくじをも、とゞめてをるほどに初ははら一人のな

一日 第三面

○旧沢伊曾保物語

かいるとうしの事

ある川のほとりに、うし一匹きこゝかしこへ、あじきをもとめありき侍りしに、かいるこれを見て心におもふやう、わが身をふくらしなば、かならずあのうしのせいほどなりなんとおもひて、きつとのびあがり身のかはをふくらして子どもにむかひて、いまはこのうしのせいほどなりけるやとたづねければ子どもあざわらひていふ、いまだそのくらゐなし、はゞかりながら御辺はうしに、によりたまはず、まさしくかぶらのなりにこそ見え侍りけれ御かはのちゞみたる所

んぎとぞ見えける、かくて日かずへにけるほどに、なじかはよかるべき五/たい六/こんめ/いはくして、ついにくたびれきはまる、/こんきうするにをよびて/ものとのごとく、はらに／したがふべしといふ、／
そのごとく人としてもいまゝでしたしき中をすてゝしたがうべきものにしたがはざるは天道にもそむき、にんあひもはづれなんず、かるがゆゑに鳩をにくみまめつくらぬとかや

〔校注〕①(第二種本「くたんのはら」) ②したかはされは ③にんあひにも ④かるかゆへにことわき

侍るほどに、いますこしふくれさせ給はゞ、あのうしのせいになり給ひなんと、申しければ、かいる答て申すやうそれこそいとやすきことなれといひて、ちからをよび、ゑいやつと身をふくら／しければ思ひの／に外②かはにはか／にやぶれて、はらわた出てむなく成にけり、そのごとくをよばざる才智位をのぞむ人はのぞむことえずつゐにをのれが思ひゆへにかへつてわが身をほろぼす事あるなり

〔校注〕①にたりたまはず ②思ひのほかに

狼とはすとの事

あるとき狩人おほかめがりに、ゆきけるに、このおほかめある木かげにかくれおれり、しかるをはすとのを①見つけてけり、それによつて、このおほかめはすとのにむかひて申しけるは我命をたすけたまへと②ひたすらたのむ、それは、はすとの③やすくうけがう④、おほかめ心やすく居けるところに、かりうど来てはすとの⑤に申しけるは、この辺におほかめやきたると、たづねければ、はすとの⑥めづかひにて、これををしへける、かりうどその所をさとらず、はるか奥に行過たり其後おほかめまかり出ていづくともしらずにげさりぬ、ある時このおほかめのはすとの⑦にゆきあひけり、はすとの⑧申しけるはわこぜはいつぞや、たすけけるおほかめかといへばおほかめ答へていふさればとよ御辺のことは、よかんなれど御へんのまなこは、

ぬきすてたく侍るとぞ申しける、其ごとく我も人も
外によき事をするかほなれども内心はなはだ悪道な
れば、かのはすとる⑧にことならず、すみやかに内心の
へだてをなすこと⑩一しむふらん善事をすべし
〔校注〕①はすとる ②たすけたまへど「と」は見せ消ち
③はすとる ④けかう（第二種本「うけかう」）。卷子本に
「う」の脱落 ⑤はすとる ⑥はすとる ⑦はすとる
⑧はすとる ⑨はすとる ⑩（第二種本「なし事なく」）

一二日 第二面

○旧伊曾保物語 狐と庭鳥の事

ある時にはとり、そのに出てえじきを、もとむると
ころに、きつねこれをくらはやと思ひまづばかり
ごとをめぐらして申しけるは、いかに庭鳥どの御辺
のちゝごとは、したしく申し承はり候ひぬこの後は
御辺とも申し承まはらめといひければ、にはとりま
こと哉と思ふ所にきつね申しけるはさても御辺の父
ごはおんこゑのよかんなるぞ、あはれ一ふしうた
ひかへかし①、きつね侍らんといふ庭鳥ほめあげられて
すでにうたはんとして、めをふさぎ、くびをのべける
所をしゃかしと、くはへてはしるほどに、にはとりの
なくこゑを聞つけて主追かけて、わがにはとりぞと、
さけびければ、きつねをたばかりけるは、いかにきつ

ねどの、あのいやしきものゝぶんとして我にはとり
と申し候に②御辺のにはとりにてこそあれと返答した
まへど、いひければ、きつねげにもとやおもひけん、
にはとり③をさしはなし、あとを見かへるひまに庭鳥
すでに木にのぼれば、きつねおほきに、げふてんし
て、むなしく山へぞかへりける、そのごとく人が物
をいへと、おしゆればとて思案もせず、あはてゝ物を
いふべからず、かのきつねがにはとりを取りそこな
ひけるも思案なげにものをいひけるゆへにぞ

〔校注〕①うたひ候へかし ②申候に ③（第二種本「そ
のにはとり」）

人をねたむは身をねたむといふ事
ある御門二人の人をめし出したまふ事ありけり一人
はよくしんふかきものなり、いま一人は人をねたむ
心ふかきものなり御門二人のものに仰けるは、なん
ぢらわれらに、いかなる事をものぞみ申せ後にのぞ
まんものは前の望みに一ぱいをあたへんとしたまへ
ば、よくしんあるもの④はなにごとにもあれ一ぱい
とらんとおもふによて、はじめにこひたてまつらず
今一人のものは何事にてもあれ人を⑤そねむ者なるに
よて我にまさりてかれにとらせんもねたましと思
ひけん是も初にこひたてまつらず、われさきにせよ
人さきにせよといどみあらそふほどにじこくうつり
ければ、とく／＼とりんげんならせ給ふほどに、かの
候人思ふ⑥こゝなるやつめがあまりによくしんふかき

ことのねたましければ、彼に^{かれ}あた^④をのぞまんとて、すみ出て申しけるはしからば我^{われ}かた^⑤のまなこをぬきたく侍るとそうしければ、やすき所望^{しよまう}とてかためを抜^ぬけ、そのごとくねい人^{じん}といふものは人^{ひと}のさかふることをみてはかなしむかほして内心^{ないしん}にはよろこぶものなり、さればかものおれがかためをぬかるゝといふともかれが両^{りやう}が^んをぬかんがためまづくるしみをかん^{かん}にんせんとするにや、このねい人を上らんありて御門^{みかど}これをあはれみ給^{たま}ひ、いま一人はつゝがもなくてぞまかりかへる、人におしがけむとおもふは、まづわが身^みのくるしみと見えたり、ちをふくみて人^{ひと}にはけは、まづそのくちけがるゝこそ申しつたへけれ

〔校注〕①よくしんなるもの ②人 ③佞人思やう（後で「ねい人」があるので、「佞人」は「ネイジン」と読むべき所） ④あた（一七世紀においては「あた」）

一三日 第二面

○旧訳伊曾保物語

つるときつねの事

ある田地^{でんち}につるゑじきをもとめてゐたりしに古老^{こらう}のきつねかれを見てたばからばやと思^{おも}ひて、そばに近^つ付^づていふ、いかにつるどの御^ごへんはなに事^{こと}をかたづねたまへる、もしもしく侍^{はべ}らば、わがたく^⑥へ来^{きた}らせ

よ、めづらしきものあたへんと、いとむつまじくかたらひければ、つるゑたりかしこしとよろこびて、同心^{どうしん}すきつねいそぎはしりかへりて、かゆのやうなる、しよく物^{もの}をあさき、かなばちにいでて、つるにむかひていふやう御^ごへんはかたきものをきらひたまふとなれば、わぎとかゆをこそとて、さゝげゝれ、つるくだんのながき、はしにてくはんくはんとすれどかなはさればきつね是^{これ}を見^みて御^ごへんはふしよく見えたり、かゝるちんぶつをむなしくすてんよりはわれに給^{たま}はれとて、みなをのれがとりくらいて、きつくはいなりと、あざければ、つるはなはだむねんに思^{おも}ひて、いかさまにもこの返報^{へんぱう}をせばやと思^{おも}ひてかへりしが、ややほどへて、つるくだんのきつねにむかひて②いふやう、われたゞいまめづらしきしよくもつを、まふけたり来^きりてしよくしたまへかしとすゝめければ、きつねすはや、せんのへんぼうかとて、つるのたく所^{ところ}③にいたりけり、そのときつるくちのほそき入物^{いれもの}に匂^{にお}ひよきくいものを入^いて、きつねの前^{まえ}④をき侍^{はべ}りければ、きつねこれを見るよりも、このましくおもひて、いれものゝまはりを、かなたこなたへめぐりけれども、かなはざるを、つるおかしのさまやと見^みて申しけるはさても御^ごへんはをろかなる人^{ひと}かな、たゞいめ⑤めしの時^じ分^{ぶん}なるに、いかでまひおどられけるぞ、くゐはたしてこそしまはんずれ⑥、いづくいやうをおしへんとて、くだんのくちばしを、さしのべてとくくいつくし侍^{はべ}れば、きつねめんぼうしなひて立^{たち}さりぬ、そのこ

とくに、みだりに人をあなどらば人又をのれをあな
どるべし人をねんごろにせば人またわれをあはれむ
ものなり、これによつていかほども人にはあなどら
るゝとも、われ人をあなどる事なかれ、たとひをろ
かにするとも、へりくだりてしたがはんにはしかに
と見えけるなり

〔校注〕①たく所 ②あひて ③たく所「宅所」で「タク
ショ」と読むべき所 ④前に ⑤たゝいま ⑥くるはた
してこそはまはんすれ

一五日 第三面

○旧訳伊曾保物語 さると大との事

ある女ざる一度に二子をうみけり、されば我たいな
いより同子をうみながら一つをばふかくあひし一つ
をばをろそ／かにす、か／のにくまれ／子い／かと
もせんかた／なくて、月／日を／くれ／りわがあい／
する子をば／前に／いだ／き、／にく／む子／をば／
せな／かに／をけ／り、／ある／時／うし／
るよりたけき大きたることあり、このさるあはてさはひで／
にぐるほどに、いだくこをか／たわきにはさみてはしるほど／
に、すみやかに行くことなし、しきりにかのいぬ近付
ければまづ命をたすからむと、かたてにて、わきばさ
みたる子をすてゝ、にげのびけり、かるがゆへにつね

にくみてせなかにをけるにくまれ子は、つゝがも
なく取つき来れり、かのてうあひせし子はいぬにく
ひころされぬ、いくたびくやめどもかひなきによつ
て、つるにかのにくみける子をおほしたてゝ、まへ
の子のごとくにてうあひせり③
其ごとく人としてもいま迄④むつぶも、たゞこのさる
のたとへにことならず、これによて是を思へば、か
れはよし、かれは悪し⑤と、しなをあらぶべからず、た
れもひとしく思ふならば人亦我を思ふべきことうた
がひなし

〔校注〕①せんかたなふて ②（第二種本「にくむ子を」
③（卷子本もここで改行） ④（第二種本「今迄したし
く思ものにとんしをろかなる物に」。卷子本に脱落がある）
⑤かへこれは悪し（「か」の右に「こ」を加える）

かはらけまんきをおこす事

あるかはらけをつくりて、いまだやかざるまへには
しけり、このかはらけ思ふやう、さてもわが身は、く
はほうめでたきものかな、あるひは田夫野人のふみ
物たりし土なれども、かゝるめでたき折節に生れあ
ひて人にあひせらるゝことのうれしさよと、まんじ
ゐける所に夕立かのかはらけのそばに來りて申しけ
るは御辺は何人にておはせしぞと、とひければ、かは
らけ答ていふ我はこれ帝王のさかづきなり、いやし
きものゝすみかにゐたる事なしと申しければ夕立申
しけるは御辺はもとを忘れたる人なり、いまださや

うにいみじくほこりたまふとも一雨あたまにかゝる
ならば、たちまちもとのつちとなりて、かはや、かき
かへにぬられなんず人もなげにまじたまふものか
など云すてゝ、にはかに夕立かみなりきはひで、か
のかはらけをふりつぶしければ、もとのつち①とぞな
りたりける、そのごとく人の世にありて、せいろに
ほこるといへども、たちまちはらけの雨にくたく
るがごとく、ぶじやうのあめにさそはれて、のべのつ
ちとぞなりにける我身よく／＼観ずれば、かのかは
らけにことならず、をんあひのしたしき、いもせの中
もおもへば、こんばんつちなりけり、かくけがらはし
き土をのみあひして、たうらいのつとめをせぬ人は
むじやうのゆふだちにうたれん時ちたびくゆるとも
かひあるまじ、かねてこのことをよくあんぜよ

〔校注〕①つち（第二種本「つち」。「つち」とあるべき所）

一六日 第二面

○旧訳伊曾保物語

わらんべと盗人の事

ある井のそばに童子一人あたりしが、あなた、こなた
をながめける間にぬす人一人はしり来てこのわらん
べを見て心に思ふやう、あなうれし、このものゝ、い
しやうをはぎとらばやと思ひて近付侍るほどに、ぬ
す人の悪念をさととりて、いとかなしき気色をあらは

して、なく／＼居たりしがぬす人は是をみて何事とも
しらず、よのつねのかなしみにはあらず、いとうしく
おぼえて、さしよりて、いかなることをかなしむといへ
ば、わらんべいふやう、まことはなにを①かくし申さ
ん、心にうきことあり、たゞいま金のつるべをもつて水
をくまんとする所に俄になはがきれて井におち入
ぬ、ちたびたづねもとむれども、せんかたなし、いか
にしてか主人の前にて申すべきやと、いひければぬ
す人は是を聞ておもてには、あはれにかなしきふりを
あらはして、なぐさめていふ、いとやすき事かな、わ
れそこへ入てひきあぐべければ汝いたくなげくべか
らず、わらんべ是を聞てうれしくて涙をのぎひて、た
のみにけり其時ぬす人きものをぬぎてをき井の中
におりて、こゝかしこ見尋ぬるひまに、わらんべこ
のきり物②を取ていづくともなくにげさりぬ③
ぬす人やゝひさしくつるべをたづねけれども是にあ
はずかゝるほどに上にあがりしかば、をきたるきる
ものもわらんべも、うせて見え侍らず其時われと我
身にかつて、ひとりごとをいふやう、まことに道理
の上より是を天道④はからひたまふ、そのゆへは人の
ものをぬすまむとするものは、かへつてぬすまるゝ
物なり／＼と云て、あか／＼はだか／＼にてか／＼へりにけり、
そのごとくわれ人も前後始終をたゞさずして、みだ
りに人をたばからんとせざれ、たとひあひ手⑤いやし
きものなりとも、まげんと⑥せばそのごとく⑦あるべし
何事もいたさぬさまに、まづきたるべきそんとくを

かんがゆべき事もつともだうりにかなふべし」

〔校注〕①まことにはなにをか ②きる物 ③(卷子本もここで改行) ④天道(一七世紀においては「てんたう(デントー)」 ⑤あひ手に ⑥りをまけんと ⑦(第二種本「そのくい」)

修行じやの事

ある修行者ゆきくれて、はづかなる、あやしのしづのやに一夜①宿をかりける、あるじなさけふかきものに、けちゑんにとてかしけるころは冬されの霜夜なれば、てあしこゑてかゝまりければ、わがいきをふきかけて、あたゝめけり、やゝ有て後あつきめしをくうとて、いきをもつてふきさましければ、あるじ此由を見てあやしき法師のしわざかな、つめたきものをばあつきいきを出してあたゝめ、あつきものをばひやゝかなるいきを出してさまし侍るぞや、いかさまにもたゞ人のしわざとも見えず、てんまのげんじ来れるやと、をろかにおそれて、曉がたにをよびて追出しぬ、そのごとく至て心つたなきものはわが身にぐそくしたる事をだにもわきまへず、やゝもすればまだひがちなり、これほどのことをだに、わきまへぬからは、よき事を見ては、かへりてあしとや思ふべき、かねて是を心得よ是はうちきけばをろかなるやうなれども人の世にあつて道に迷へること、かのあるじが人のいきの、あつきと、ぬるきと、わきまへかねたるにことならず

〔校注〕①一夜(卷子本に「ひとよさ」と読むべき積極的根拠は見出せない) ②わきまへぬやからは

一七日 第二面

○旧訳伊曾保物語

狼 といのしゝの事

さるほどに、いのしゝ子どもあまたなみぬける中に、ことにちいさきいのしゝが、まんをおこして、そのつかさとなるべしと思ひて、はをくひしぱり、めをいからし尾をふつて、とびめぐれども、はうばいら一かうこれをもちいず、かのいのしゝきをくたびらして所詮かやうのやつばらにくみせんよりは他人にうやまはればやと思ひて羊どものなみぬける中に行てまへのごとく、ふるまひければ、ひつじいきほひにをそれてにげかくれぬ、さてこそ此いのしゝ本座を達して居ける所に狼一びきはせ来りけり、あわやとはおもへども我はこれ主なれば、かれも定めてをそれなんとて、さらぬていにてゐける所をおほかめとびかゝり耳をくわへて山中にいたりぬ、ひつじもつてがうりよくせず、おめきさけびゆくほどに、かのいのしゝはうばい、このことを聞つけて、つゐにとりこめたすけにけり、その時こそむやくのむほんしつるものかなと、もとのいのしゝらにかうさんしける、そのごとく人の世にある事もよしなきまんきをおこし

て人ひとをしたがへおく^③おもはゞ、かへつてわざわひをまねくものなり、つゝめにはもとのしたしみならでは、まことのたすけになるべからず」

〔校注〕①かまんをおこして「我慢を起こして」と解すベき所 ②かうりよく「合力」は一七世紀においては「か」は清音 ③したかへたく

鳥人に教化をする事

ある人かた山やまのほとりにをゐて、小鳥こどりをさしとることあり是をこれころさんとするに、かの鳥とりさへて申しけるは、いかに御辺ごへんわれほどの小鳥こどりをころさせ給へばとて、いかばかりの事ことあゝるべきや^①、たすけたまはば三つの事ことをおしへたてまつらんといふ、さらばいへとて、その命いのちをたすく、かのとり申しけるは第一にはあるまじきことをあるべしとおもふことなかれ第二にはもとめがたきことをもとめたきと思ふことなかれ第三にはさつてかへらざる事をくやむことなかれこの三つをよくたもたばあやまりあるべからずといふを聞きて、このとりをはなしぬ、その時鳥たかき木きずゑにとびあがり、さても御辺ごへんおりてゑじきをはみける所に、きつね近付ていふ、そも御辺^②はおろかなる人かな、わがはらにならびなきたまをもてり、是を御辺ごへんとり給はゞ世にならびなくさかへたまふべきものをとわらひければ、かの人ちたびこうくはいして二たびかの鳥とりをとらばやとねらふほどに、かの鳥又申しけるはいかに御辺ごへんにまさりたるつたなき人

はあるまじ^③そのゆへはたゞいま御へんにをしへけることをばなにとか聞きたまふや第一あるまじきことをあるべしとおもふことなかれとは、まづわがはらにたまありといふは、あるべきことやいなや、第二にはもとめがたきことをもとめたきと思ふことなかれとは我を二たびとることなかるべからず、第三にはさつてかへらぬ事をくやむことなかれとは、われを二たびはなし^④かなはぬものゆへねらふことさつてかへらぬをくやむにあらずやとぞ、はぢしめにける^⑤そのごとく人つねにこの三つにまどへるものなり、よきをしへのまへにありといへども、これを見聞ながらたもつもの一人もなし、あながち鳥のをしへたるにもあるべからず人はけだものにもをとるといふことをしらしめんがためとかや

〔校注〕①ことか候へきや ②これは、「鳩ときつねの事」(卷子本中巻第八話、仮名草子では下巻第二八話、『絵入朝野新聞』九月二十六日掲載)の文が混入している。卷子本中巻第八話では「おりて多しきをはみける所にきつね近付て云そも御辺」 ③候まし ④はなものはなつもの」とあるべき所で、卷子本に「つ」の脱落がある ⑤(卷子本もここで改行)

一八日 第二面

○旧訳伊曾保物語

人の心のさだまらぬ事

ある翁いちに出て馬をうらんとおもひおや、^①あとにくるしげに、あゆむほどに道行人これを見て、あなおかしのおきなをしわざや、むまをもちては、のらんがためなり、むまをさきにたてゝ、ぬしはあとにあゆむ事はかきのめに水の見えぬといふも、このことにやといひてとをりければ、おきなげにもと思ひけんわかきものなれば、くたびれやするとて、わが子をのせて我はあとにぞつきにける又人これを見て是なる人を見ればさか／＼なるも／＼の^②むまに／＼

のりて、／＼おきなは／＼かちより／＼行くとしてわらひければ又子をおろしておきな乗りぬまた申しやるは^③、これなる人を見れば、おや子と見えけるが、あとなる子はもつてのほかくたびれたる「ありさまなり、かゝるたくましきむまにのりながらおやこひとつにのりもせで、くたびれけるはおかしさよといひければ、げにもとてわが子をしりむまにのせけり、かくて行くほどにむまやうやく、くたびれければ又人の申しけるは是なるむまを見れば、ふたりのりけるによて、ことのほかくたびれたり、のりてゆかんよりは四つあしを一つにゆひあとの^④二人してになひてこそゆかんめれ^⑤といひければ、げにもとておや子してになふ又人の申しけるは、おもきむまをになはんよりはかはをはいでかるがるともつてうれかしといへば、げにもとて、かはをはがせてかたにかけ行くほどに、みちすがらはいども、とりつゐて、

めくちもあかず、いちの人々これをわらひければ翁はらたてゝ、かはをすてゝぞかへりける、そのごとく一度かなた、こなたとうつるものは^⑥、つねにしぶかなる事なしと見えたり、かる／＼しく人のことをしんじて、みだりにうつることなかれ、たゞしよきみちには、いくたびもうつりて、あやまりなし、こと／＼によければとてうろんに見ゆる事なかれ、たしかにつしめ

《校注》①（第二種本「親子つれていたりける馬をさきにたてゝおや子」。卷子本に脱落がある） ②さかん成物は

③申けるは ④ゆひあつめ ⑤（第二種本「よかんめれ」）

⑥（第二種本「うつるものはおきなかしわきにことならすこゝろかろきものは」。卷子本に脱落がある）

一九日 第二面

○旧訳伊曾保物語

庭鳥と狐とのこと

あるときつねゑじきを^①もとめかね、こゝかしこをさまよう所に庭とりゆきあひたり、ゑたりやかしこしと是を取てくらはんとす庭鳥この事をさとりてある木のえだにとびあがりぬきつね手をうし／＼

なふてせんかたなきに、し／＼せん庭とりをたぶらかし／＼てこそくはめと思ひてかの／＼木のもとにたちよつて、い／＼かに庭鳥きこしめせこの／＼万のとりけだもの／＼なか／＼

なをり^②することあり御鳥^③はし／

らせ給はぬかひさしく申し上げたまはらぬによとて^④
、わざとこそ是まで参りて候へ^⑤と、いとむつまし
げに語りければ庭鳥きつねのぶりやくをさととりて誠
にかゝるおりふしに生れあひぬる事こそめでたう候
へよくあひたり、犬能やうにはからひ給ふべしとい
ひて、さらにおりず、きつねかさねて申しけるは、ま
づこの所におりさせ給へひそかに申すべき事ありと
、しきりによべども、つるにおりず、庭鳥用ありさう
に、あなたのかたをながめければ、きつね下より見あ
げて御辺は何事を見たまふぞと申しければ、されば
とや、たゞ今御辺の御ものがたり^⑥し給ふ事をつけし
らせんとやおもはれけん犬二ひきはせ来り候^⑦と申し
ければ、きつねあはて、さはひで、さらばまづそれが
しは御いとま申すとてさらんとす庭鳥申しけるはい
かにきつね、とりけだものゝ中なをりしける折ふし
何事かは候ふべき、そこにまちていぬとまじはりた
まへと、さゝへければ、きつねかさねて申すやう、も
しかの犬中なをりごと^⑧しらずは、わがためにあしか
りなんとて、にげさりぬ、そのごとくたとひ人われに
あだ^⑨をなすべきものとさるととも、あだ^⑩をもつてむ
かふべからず、かれがぶりやくにてむかはと、われも
ぶりやくをもつてしりぞくべし

〈校注〉①多しきに ②なかになをり ③(第二種本「御
辺」) ④うけたまはらぬによとて ⑤候へ ⑥(第二種本「物
かたり」) ⑦候 ⑧中なをりごと ⑨⑩あた(一七世紀に

おいては「あた」)

二〇日 第二面

○旧訳伊曾保物語

出家と盗人の事

ある法師道を行ける所にぬす人一人ゆきむかひて、
かの僧をたのみけるは見たてまつれば、やんごとな
き御出家なり、われならびなき悪人なれば、ねがは
くは御いのりをもつて、わが悪心をひるがへし善人
となりそ^①やうにきせいしたまへかしと申しければ
それこそわが身にいとやすきことなれとりやうしや
うせられぬ、かのぬす人も返す^②たのみでぞこゝ
を^③さりぬ、そののちはづかにほどへて、かの僧とぬす
人とゆきあひけり、ぬす人僧の袖をひかへて、いか
つて申しけるは、われ御へんをたのむといへども、そ
のかひなし、きせいしたまはずと申しければ僧答
て云ふ我はその日よりへんじ^④のいとまもなく御へん
の事をこそいのり候へとのたまへば、ぬす人申しけ
るは御ことは出家の身としてそらごとをのたまふも
のかな、その日よりあくねんのみこそおこりさふら
へと申しければ僧のはかりごとに、にはかにのどか
はきてせんかたなしとのたまへば、ぬす人申しける
はこれに井どの侍るぞや、われうへよりなはをつけ
て其そこへ入たてまつるべし、あくまで水をのみた

二二日 第二面

○旧訳伊曾保物語

おほかめときつねの事

ある河の辺にきつねうほをくひけり、^①おりふしおほかめ上^{うへ}にのぞんであゆみ来^{きた}れり、おほかめ^②申すやう、そのうほをすこしあたへよ、ゑじきになしてんといひければ、きつね申しけるは、あなおそれおほし、わがわけをたてまつるべしや、か^③ごを^④ひとつもち来^{きた}らせたまへうほを取てまいらせんといふ狼かしこにかけまはりて、か^⑤ごとりとてぞ来りける、きつねおしへけるやうは、このか^⑥ごを尾につけて河のまん中ををよがせたまへ、あとよりうほをおいれんといふ、おほかめか^⑦ごをく^⑧り付て河をくだりにおよぎけるきつねあとより石をとり入れければ、しだいにおもくて一足もひかれず、おほかめきつねに申しけるは、うほの入たるか、ことの外におもくなつて、ひとあしもひかれずといふ、きつね申しけるは、さんさふらふことのほかに、うほの入て見えさふらふほどに、わがちからにてはひきあげかたくさふらへば、けだものをやとひてこそまいらめとてくがにあたりぬ^④、きつねあたりの人々に申し侍るはかのあがり^⑤のひつじをく^⑥らいとる、^⑦おほかめこそたゞいま川中にてうほをぬすみそ^⑧と申しければわれさきにとはしり出でさん／＼にちや／うちやくしける、／そばよりそつちも／

まひて、あがりたくおぼしめしそふらはど、ひきあげたてまつらんとけいやくして、くだんの井^いどへおし入れけり、かの水^{みづ}を^④のみてあがらんとしたまふときぬす人^{びと}ちからをいだしてゑいやとひけどもいさゝかもあがらず、いかなればとてさしうづぶきて見れば、なじかはあがるべきかの僧^{そう}そばなる石にしがみつきてゐたりけり、ぬす人^{びと}いかつて申しけるは、さても御^ご辺はをろかなる人かな其儀^{そのぎ}にてはいかゞきたうもしるしあるべきや、そのいしはなしたまへ、やすくひきあげたてまつらんといふ僧^{そう}ぬす人に申しけるは、さればこそわれ御^ごへんのきねんをいたすもこのごとくさふらふぞよ、いかにいのりをなすといへども、まづ御身^{おんみ}の悪念^{あくねん}のいしをはなれ給はず候^{まち}ほどに、くろがねのなはにてひきあぐるほどのいのりをすればとてかねのなはゝきるゝとも御^ごへんのごとくつよき悪^{あく}ねんは善人^{ぜんにん}になりがたくそ^⑥と申されければ、ぬす人^{びと}うちうなづきて、かの僧^{そう}を^⑦ひきあげたてまつり、あしもとにひれふして、げにもがなとて、それよりもとゆひきり、すなはち僧^{そう}の弟子^{でし}となりてやんごとなき善人^{ぜんにん}とぞ成^{なり}にける、この教^をを見む人はたしかにこれを思^{おも}へゆるがせ^⑧にする事なかれ

〔校注〕①候 ②たのみてそこを ③へんし（「片時」。一七世紀においては「へんし」） ④（第二種本「かのそう水」を） ⑤候 ⑥候 ⑦かの僧の（第二種本「かのそうを」） ⑧ゆるかせ（一七世紀においては「ゆるかせ」）

のはしり出てかた／なをぬいてこれを／きるに、なにとか／
したりけん尾をふ／つとうちきつて、／その身山へぞにげ／
いりける、おりし／も師子王いれい／の事／ありけ／
るは御き／しよく／大事に／見えさ／せたま／ふわれ／

このほ／どしよ／

国をめぐりて承まはりをよびさふらひぬ、きつねの
いきかはを御はだへにつけさせたまはゞ、やがて御
へいゆうあるべしと申す、きつねこの事をつたへ聞
て、にくひおほかめがそせうかなとおもひながら、め
しにおふじて師子王の御前にいつはりごと、をの
れが身をどろにまろびして出来たり師子王このよし
を見るよりもちかふまいれ申すべきさいあり近き
ほどなんちを一人のひととさだむべきなど、めでたふ
申しければ、きつねさつして答ける、あまりあわて
さはいで参じけるとて道にてまろびそろ／＼ほどに、も
つての外にしやうぞくのけがらはしくそろ／＼かへつ
て御礼のさはりともなりなんやと云てかさねて申し
けるは、われこのほど人にならひそろ／＼にかやうの御
いれいには尾のなき、おほかめの四つあしと、つらの
かはをのこし、いきがはをはぎて、めさせたまひさふ
らへば、たやすくへいゆうすとつたへてそろ／＼たゞし
をのなきおほかめはあるべうもさふらはずと申しけ
れば獅子王是こそ／＼にあれと、かのおほかめをま
つ所に何心なくまいりさふらひける、すなはち獅子
王ひきよせて、いひしごとくに、かはをはひで、いの
ちばかりたすけにけり、そのちある山のそばに、

くだむのきつねながめぬけるおりふし又おほかめも
そこをとる、きつね申しけるは、これを、とをらせ
たまふはたれ人にてわたらせたまふぞ、かほどあつ
きえんてんにづきんをかき、たびをはき、ゆかけを
さいて見え給へば、もしひがめにてもや候らはん五
体を見ればあかはだかにて、あふそ、はちそ、ありな
んどいふものすきまなくとり付たり、たゞしきる
ものゝかたにて、はし侍るか、よく／＼見さふらへ
ばいつぞや師子王によしなきそせうしたまふおほか
めなりとてあざけりける、そのごとくみだりに人を
さんそうすれば人又われをさんそうする春来るとき
は冬又かくれぬ夏過ぬれば秋風立ぬひとりなもの
か世にほこるべきや

〔校注〕①（第二種本「くひける」）②（第二種本「きつ
ねに」）③かこせ④あかりぬ（「あかり」と次行の「あ
たり」とを取り違えている。植字の誤りか）⑤あたり（前
項参照）⑥くらいたる⑦候⑧（第二種本「其身は」）
⑨御きしく（「御気色」の意。第二種本「御きしよく」）
⑩候⑪候⑫候⑬候⑭（第二種本「命はかりを」）
⑮みえ給は（「見え給ふは」と読むべき所）⑯候らん
⑰はいそありなんと⑱とり付たる⑲（「着る物のかたに
てばし侍るか」と読むべき所。「ばし」は副助詞）

二三日 第三面

○旧訳伊曾保物語

狼 ゆめものがたりの事

ある時おほかめ夢に高位にちうして、あくまでしよくすと見たりける明日おほかめ山を出る時みちの辺にいのしゝのはらわたあり、すはやめでたし、はやゑじきのありけるよと、よろこびさかへけるが、いやいやこれははらのどくなり、よきゑじきこそは、くはめとて、そこをすぎて行ぬ、ある山のそばに子をつれたるむまありけり、おほかめこの由をみて、これこそよきゑじきなれく／わばやと心えてむ／まにむかひて申しけるは、なんぢが子をわがゑじきとなす／べし心へよ／といひけれ／ば馬答て云／ふ兎もかく／も仰にこそ／は、従はめ／

とてあたりけるが、むまおほかめに申しけるは、承まはりさふらへばけやうの上手と申すわれこのほど足にくゑをふみてゝさふらへば、おそれながら御めにかたしと申す、やすきことといふほどに、むまかたあしをもたけて、これを見たまへといひければ、おほかめうちあふのひで見る所をさしより下に「みおとし、わが子をつれてかへりけり、おほかめこれを③ことゝもせず、たゞいまこそしそんずる④とも又こそとおもひ、かしこにかけめぐるほどに、のべに野牛二ひきゐたり、おほかめ是を見て是こそと思ひ野牛⑤にむかひて申しけるは、なんぢが内一ひき我れゑじき⑥にすべきと申しければ、やぎうつゝしんで承まはり⑦、ともかくもにて侍るなり、こゝに申すべきしき

いあり、ひさしくあらそふことの侍れば御さいばんをもつてのち、なにともはかせたまへかし⑧と申しければ、おほかめなにこそぞとふ⑨、やぎう答て云ふこの野をふたりあらそひそろ⑩、たゞし給ふべきによて⑪せうぶを付けがたくそろ⑫、しからずはわれら二ひきむかひより御そばにはしりきたりさふらふべし、とくはしりつきたらんものに、その理をつけさせたまへといふ、とく／と申しければ、やぎうむかひより左右にはしりかゝりつにておほかめのおとはらをかきゝつて、その身は山にぞいりにける、おほかめさずをかうむりて、こはしあわせわろきことかなと、はないきならして、そこをすぎぬ又河のほとりにぶたおや子あそびあける所に⑬是こそと思ひぶたにむかつて申しけるはなんぢが子をゑじきとすべし心へよと申しければぶたこゝろへて云ふ、ともかくも御はからひにまかせ侍るべし、たゞし我子はいまだようせうにさふらへばかいゑんをさづけずそろ⑭、見申せば御出家の御身なり御けちゑんに、かいをさづけたまへかしと、のぞみければ、ほめあげられて、さらばといふ、はしのうへのぼりて、こゝに來れと申しけるを、ぶたわが子をつれて行きさまに、つとよりてはしより下につきおとし、わがみは家にぞかへりける、おほかめうきぬ、しづみぬながされてやう／とはひあがり、あら夢見あしやとぞ

〈校注〉①子をは ②うちあふのひて（「うち仰のいて」と読むべき所） ③これは（第二種本「是をは」） ④しけん

すると⑤（振り仮名の「う」は「い」のように回転している）⑥我多しき（「我が餌食」と読むのだらう）⑦つしんで承て⑧（第二種本「はからはせ給へかし」）⑨なに事そととふ⑩候⑪（第二種本「但給ふへき人なきにて」。「糺し給ふべき人なきにて」の意。卷子本に脱字）⑫候⑬（第二種本「所を」）⑭ともかうも⑮候

二四日 第三、四面

○旧訳伊曾保物語

出家とゑのこの事

ある人ゑのこ二匹なづけそだて是れをあひしけるが年ごろありて何とかしたりけん彼のゑのこにはかに死することありけり、主じこれをなげきかなしみて心に思ふやう、かゝるいとけなき、ゑのこのしがいい山野にすてんよりはとて、寺のかたはらにうづまばやと思ひて日くれにのぞんで人に忍びて是をとりつつ、たうのほとりにうづみける、やゝあつてかの寺の僧これをつたへ聞きこは何ものゝしはさぞや、かゝるらうぜき前代未聞ためしなしいひければ、かあるじをよびて、すでにあやしういましめられ侍りける、あるじ更に返答にをよばず、せきめんしてゐたりしが、のがるべきかたなくて、この出家の重欲心をさととりて申しけるは御辺のおほせらるゝ所もつと

も道理至極なり、しかれども御存なきにや侍るらん④このゑのこ臨終に⑤さもありがたういみじき心ざしあり、それをいかにと申すに後世をとふらはれん其ために、もちたる百貫のれうそくを貴僧にたてまつるべしといひおき侍るとありければ、僧これを聞て思ひの外にいさむ気色にていふやう、さてもくかゝるありがたき心ざしはたごとにあらず我をろかなるもの、身として、ゆめ／＼是を知ずといましめ侍るなり御辺はなげきたまふことなかれ、これほどの心ざしを持たらばたとひ畜類なりといふとも、かならずごくらくへ生れん事いさゝかもうたがひたまふ事あらじわれともに、かのあとをねんごろにとふらふべしとて、このゑのこのこゝろざしをきとくなりてたつとまされる、そのごとく、よくにふけるものはかの僧にことならず人あつていんぶつをさゝげければ、たからにめをくらまして⑥理を非にまぐるることこれおほし、かるがゆへに、よくふかければかいをやぶり、つみをつくり身をほろぼすものなりとぞ見えける是をよく思ふべし⑦

〔校注〕①しかいは②とてもものことに③（第二種本「よひてて」）④侍らん（「はべらん」と読むのだらう）⑤ゑのこのりんしう⑥をろかなる物の身として⑦もろとも⑧くらして⑨（紙面も変わる。全体を通じて紙面変わるのはこのこのみ）

ある人仏をいのりし事

ある人ひとつの仏ぶつをあんちしてつねに名利ふく
ゆうをいのる、日にそひてまづしく、いやくくなれど
も、さらにそのりしやうなし、是によてかの人がいつ
て仏ぶつを取て打くだく所に、その仏のめぐしの中
に金数百両ありけり、そのときかの人仏をいのりて
云ふさてもこのほとけおろかなる仏かな、つねに①か
う花とうみやうをそなへて、きやうをよみ礼拝をす
る時はこの金をあたへずして、その身をほろぼす時
ふくをさだめけるよとわらひよろこびけり、そのご
とく悪に究りたるもの、そのじねんをまら善に立か
へることなし、おさへて仏をわるごとく悪を善にひる
がへすやうにすべし

〔校注〕①われつねに

二五日 第二面

○旧訳伊曾保物語

たつと人の事

ある河のほとりを、むまにのりてとる人ありけり、
そのかたはらに、たつといふもの水にはなれてめい
はくするありけり、この竜いまの人を見て申しける
はわれいま水にはなれてせんかたなし、あはれみを
たれ／た／ま／ひ／その／む／ま／に／
の／せ／て／水／あ／
る所へつけさせたまはゞ、その返報として金銭をた

てまつらんといふ、かの人まこと心へて、むまに
のせてみなかみへくり、そこにてやくそくの金銭
をくれよといへば、たついかつていふ、なんのきんせ
んをかまいらすべき、われをむまにくり付ていた
めたまふだにあるに、きんせんとはなにごとぞとい
とみあらそふ所にきつねはせ来てきても竜のはな
に事をあらそひたまふぞといふに、たつ右のおもむ
きをなんひければ、きつね申しけるは、われこの
公事をけつすべし、さきにくりつけたるやうは、な
にとかしつるぞといふに竜申しけるはかくのごとし
とて又むまにのるほかに、きつね人に申しけるはい
かほどか、しめつけらるぞといふほどに是ほどとて
しめければ、たつの云ふいまだそのくらいなし、し
たゝかにしめられけるといへば、これほどかどて、い
やましにしめつけて人に申しけるは、かゝる無理む
ほうなる、いたづらものをば、もとの所へやれとて追
立てり、ひと、げにもとよろこびて、もとのほたけに
をろせり、その時たついくたびくやめども、かひな
くしてうせにけり、そのごとく人の恩をかうむりて、
そのおんをほうぜんのみ、かへりて人にあた②をなせ
ば天罰たちまちあたるものなり、これをさとれ

〔校注〕①をくる ②あた（一七世紀においては「あた」

かざみの事

あるかざみあまた子を持つるなり、その子、をのれ
がくせによこはしりする所を母是を見ていさめてい

ふ、なんぢら何によりてか、よこさまにはあゆみけるぞと申しければ子どもつゝしんで①承まはり一人のくせにてもなし、われら兄弟みなかくのごとし、しからばはうへありきたまへ、それをまなびたてまつらんとひければ、さらばとて、さきによりきけるを見れば、わがよこしり②にすこしもたかはず子どもわらひて申しけるは、われらはよこあるきか③、はうへへありかせたまふはたてありきか、そばありきかと、わらひければ、ことばなふてぞあたりける、そのごとく、わが身のくせをばかへりみず人のあやまりをばいふものなり、もしさやうに人のわらはん時は退て人の是非を見るべきなり

〔校注〕①つしんで ②(卷子本も「よこしり」。第二種本「よこはしり」。卷子本に脱字) ③よこありき候か

二六日 第二面

○旧訳伊曾保物語
鳩ときつねの事

ある時うへ木に、はと巣をくうことありけり、しかるを狐そのしたにあつて、はとに申しけるは御辺は何とてあぶなき所に子をそだてたまふや、この所にをかせたまへかし、あめ風のさわりもなし、あなにこそをくべけれといひければ、をろかなるものにて、まことかと心得てその子をりくちにうみけり、しか

るをきつねすみやかにゑじきになしぬ、そのときかのはとをどろひて木の上にすをかけり、しかるをとなりのはとおしへけるは、さても御辺はつたなき人なり、いまより以後きつねさやうに申さば汝この所へあがること①かなはずは、まつたく我子をわたすべからずとのたまへといへば、げにもとていひければ、きつね申しけるは、いまよりして御辺のうへにさはがする事あるまじ、たゞしたのみ申すべきことあり、そのいけんをば、いつれの人よりうけさせたまふぞと申しければ、はとつたなふして、しかの鳥とこたう、ある時かのはとにをしへける鳥したにおりてゑじきをはみける所に、きつね近付ていふそもそも御辺②あつばれ其事じゆうにし給ふにをいてはまことに鳥の中に③わうたるべし、たゞしきよこんやと申しければかの鳥さらばしわざを見せんとて左右にくびをめぐらし、かしら④をきつと見る時に、きつねはしりかゝつてくろいころしぬ、そのごとく日々人に教化をなすほどならば、まづをのれが身をおさめよ、わが身の事をばさしをきて人のけうげをせんことはゆめゆめあるべからず

〔校注〕①(第二種本「あかれあかる事」) ②(第二種系統の本、「御辺」の後に以下の脱落がある。「世にならびなきめで度鳥也。尋申度こと有。其故は。ねくらにやどり給ふ前後。左右よりはげしき風吹時は。いづくに面をかくさせ給ふやと申ければ。鳥こたへて云。左より風ふく時は。右のつばさにかへりをさし。右より風吹時は。左のつばさ

にかへりをさし候。前より風吹時は。後にかへりをさし候。後より風吹時は。前にかへりをさし候と申。狐申けるは。「万治整版本による。振り仮名は省略」 ③鳥の中の ④(巻子本も「かしら」。第二種本「うしろ」)

獅子王とろばの事

あるろば、やまいしける所に獅子王来りてそのみやくをとりころむ、ろばこれををるゝことかぎりなし、しゝわう懇親のあまりに、その身をあそこゝをなでまはして、いづくかいたきぞとへば、ろばつゝしんで①いふ獅子王の御手のあたり候へば②、いまゝでかゆき所もいたくぞろ③と、ふるひゝぞ申しける、そのごとく人のおもはくをもらさず、ねんごろだてゝそうたてけれ、大切をつくすといふとも、つねになれたる人のことなり、しらぬ人にあまりに礼をするもかへつて、らうぜきとぞ見えける

③候
〈校注〉①つしんで ②候は「候ふは」と読むべき所

二七日 第二面

○旧訳伊曾保物語

わしとからすのこと

あるわし多じきのためにひつじの子をつかみ取てくらうことありけり、からす是れを見てあなうらやま

し、いづれも鳥の身として、なにかはかやうにせざるべきと、がまむおこし、われもとて野牛のあるをみてつかみかゝりぬ、それやぎうの毛はちゞみてふかきものなり、かるがゆゑに、かへつておのれがすねをまとひてはためく所を主人はしりよりて、からすを取てきつくわいなり、いましめて命をたつべけれ①とてはねを、きりてぞはなしける②

ある人かのからすにむかひて汝はなにものぞとへば、からす答へていふきのふはわし、けふはからすなりといへり、そのごとくわが身のほどをしらずして人の威勢をうらやむものは、わしのまねをするからすたるべし

〈校注〉①たつへけれども ②(巻子本もここで改行)

庭鳥金のかいこをうむ事

ある人、にはとりをかいけるに日々に金のまろかしきかいこを①うむ事あり、あるじ是を見てよろこぶことかぎりなし、しかりといへども日に一つうむことをたへかねて二つも三つもつゞけさまにうませばやとて、そのとりをうちさいなめども、そのしるしもなく日びに一つより外はうまず、あるじ心に思ひけるやうは、いかさまにもこの鳥のはらには大なる金や待るべきとて、その鳥のはらをさく、かやうにしていたたらき③より、あしのつまさきまで見れども、へちのかがね④なし其時あるじこうくわいして、もとのまゝにてをかましものをとぞ申しける④

そのごとく人のよくしんにふけることは、かのあるじが鳥のはらをさけることならず日々にすこしのまふけあれば其一命をすぐるものなれども、つまかさねたく思ふによつて、つゐにあきたることなふて、あまさへにたからをおとして其身をもほろぼすものなり
〔校注〕①まろかしをかいこに ②いたゞき ③（第二種本「こかねは」） ④（卷子本もこにて改行）

二九日 第三面

○旧訳伊曾保物語

狼と人のこと

あるはすとる羊のけいごに犬をもちけれど、ゑじきをすなをにあたへざれば、やせおとろへてぞありける狼このよしを見て御辺はなにとてやせたまふぞ、われに羊を二ぴきたべ、かのひつじをぬすみ取て、にげん時あとより追かけまろびたまへ、このこと見たまふならば御へんにゑじきを給ふべしといへば、げにもとて同心す案のごとく狼ひつじをくはへてにげつる①時犬あとより追かけまろびたをれてかへりけり、はすとるいかつていふ何とてひつじをとられけるぞといひければ、いぬ答ていふわれこの程ゑじきなくしてさんぐくにびろう②仕つりてそろゆゑに③ひつじをとられてそろ④といへば、げにもとて⑤それよりしてゑじきをあたへぬ又おほかめ来りてわがはかり

ごといさゝかたがふべからず、いま一つびきひつじを給れこのたびもおひかけたまへ、われにいさゝかきずを付させたまへ、しかれどもふかではしおほせたまふなど、かたくけいやくして、ひつじをくわへてにぐる所を、つとをつかけかのおほかめをすこしくいやぶりてかへりぬ主人是を見て心よしとていよいよゑじきをあたへてすくやかにす又おほかめ来りていまひとつ所望す犬申しけるはこのほど主人よりあくまでゑじきをあたへられ五体もすくやかになり⑥さふらへば、えこそまいらすまじきといひはなしければ、なにをがなと、のぞみけるほどに、犬おしへていふ我しゆ人の籠にさまぐのえじきあり行てもちいといひければ、さらばとて籠にゆきまづさかつぼを見て思ひのまゝに飲むの飲みゑいて後こゝかしこたゞすみありくほどに、はすとりのうたふを聞て、かれきたなげなる物さへうたふに我又うたはであらんやとて大ごゑあげておめくほどに里人聞つけてあはや狼の来るは⑧、ゆみやなくいにてはせあつまる是によて、おほかめ終にほろぼされぬ、そのごとくめしつかふものにあちをくわへざれば、そのあるじの物をつぬやすと見えけり⑨
〔校注〕①にけさる ②ひらう「疲勞」と解すべき所
③候そゆへに（第二種本「候其故に」） ④候 ⑤（第二種本「けにもと」） ⑥すくやかに（第二種系統本は「すくやかに」だが、他系統本は「すくやかになり」） ⑦これをのむ ⑧（第二種本「来るはとて」） ⑨みえたり

三〇日 第三面

○旧訳伊曾保物語

男二女をもつ事

あるおと二人の妻をもちけり、ひとりとは、としたけ
て一人はわかし、ある時このおと老たる女のもと
に行く時その女申しけるは、われとしたけ、よはひお
とろへて、わかきおとにかたらふなどゝ人のあざ
けるべき^①。恥かしければ御へんのびんひげのくろき
をぬきて、しらがばかりをのこすべしといひて、たち
まちびんひげのくろきをぬいて、しろきをのこせり、
このおとこあなうやおもへども^②、おんあひにほだ
されて、いたきをもかへり見ぬかれにけり又ある
時わかき女のもとに行きけるに、この女申しけるは
われさかんなるものゝ身として御へんのやうにはく
はつとならせたまふ人をつまとかたらひけるに世に
おとこのたれもなきかななどゝ人のわらはんもはづ
かしければ御辺のびんひげのしろきをみなぬかんと
いひて是を悉皆くぬきすつる、さればこのおとこ、あ
なたにては^③ぬかれ、こなたにてはぬかれて、あづくに
はびんひげなふてぞゐたりける其ごとく君子たらん
もの、ゆゑなきいんらんにけがれなば、たちまちかゝ
る恥をうけべし、しかのみならず二人のきげんをは
からふはくるしみつねにふかきもの也かるがゆへに

ことわざに云ふふたりの君^④につかへがたとしとや」

〔校注〕①（第二種本「あさけるへきも」）②（第二種本
「思へと」）③あなたに候へは④ふりの君（第二種本も
「ふりの君」。万治整版本「ふたりの君」）

鼠のだんかうのこと

ある時ねずみ老若男女あひあつまりて、せんぎしけ
るは、いつもかの猫といふ、いたづらものにほろぼ
さるゝとき、ちたびくやめども、そのゑきなし、かの
ね／こ／、こ／ゑ／を／た／つ／る／か／

し／か／ら／ず／は／あ／

しをと、たかくなどせば、かねて用心すべけれども、
ひそかに近付けるほどに^①、ゆだんしてとらるゝのみ
なり、いかゞはせんと云ひければ、こらうのねずみ
すゝみ出て申しけるは詮ずる所ねこのくびに、すゝ
をつけてをき侍らば、やすく知れなん^②と云ふ、みな
みなもつともと同心しける、しからば、この内よりた
れ出てか、ねこのくびにすゝを付たまはんやといふ
に上等ねずみ^③より下ねずみにいたるまで、われつけ
んといふものなし是にて、そのたびの議定ことを
いはらで^④たいさんしぬ、そのごとく人のけなげだて
をいふも、たゞたゝみの上のくわうげんなり戦場に
むかへば、つねにつはものといふものも、ふるひわな
なくとぞ見えける^⑤

（大尾）

〔校注〕①近付たるほとに②知なん（「知りなん」と解す
べきか）③上らうねずみ④ことをはらて⑤（この後

に卷子本「しからすはなんち」(第二種本「なんそ」)すみや
かに敵こゝをほろほさるゝ(第二種本「ほろほさるゝ」)こ
しぬけのゐはからひたゝみ大つゝみに手拍子とも是らの事
をや申へき」と続く)